

わが心の自叙伝

菅原洋一

▷24

80を迎えた年、あまりにも悲しい別れがあった。たった一人の孫、竜悟を失くしたのだ。享年18。

ラグビーに打ち込み、大学受験を目指していた竜悟に小児脳幹部グリオーマという脳腫瘍が見つかったのだ。国内で50人から100人ほどしか患者がいないという珍しい病気で、過酷な闘病生活を強いられるという。生命機能をつかさどる脳幹に腫瘍ができたため、手術もできない。医者から「余命1年あまり」と宣告されてもまるで実感がわかない。

「見守るしかない」「覚悟を決めなければ」と何度も自分に言い聞かせたが、無理なことだ。ある時期から竜悟の体の動きが急に鈍くなった。それからあつという間に寝たきりになってしまった。

孫との別れ

病室を見舞い、耳元で、苦難のときがあつても救いは訪れる…という願いを込め私は「花は咲く」を歌った。竜悟は「うんうん」とうなずきながら聞いているように見えた。

これもやりたいだろう、あれもやりたいだろう…。そう思うだけで私の胸は張り裂けそうになった。でも彼は苦しみにも耐えながら戦っている。私ほもうこれ以上、歌を歌えなくなつてもいい、いや命を終



孫の竜悟さんと筆者

わらせてくれてもいい、だから竜悟を助けてほしいと幾度も祈った。祈ることしかできない自分の非力を呪った。でも祈りは届かなかつた。彼は自分の病名を知らぬまま、2014年7月、10カ月間

の闘病生活を終えた。涙も枯れ果て、真剣に歌うことをやめようと考えていた頃、竜悟が10歳ぐらいのときに私に渡してくれたクリスマスカードを改めて見直してみた。そのカードには竜悟が自分で星を描いていた。ふと「亡くなった人は星になるんだよ」と孫に話したことを思い出した。そのカードに書かれている文字を見て驚いた。

「いままでありがとう」。10歳そこらの子が書いているのだ。もらったときは何も感じなかったが、それを見ながら私は「輪廻転生」という言葉を思い浮かべた。人の命は死んだ魂の生まれ変わり、この世での修行が終わると元の世界に戻るといふ訓えだ。つまり彼の修行は18年だったのではない。18年の短い間にいろいろなことに挑み学び、きつと人生を全うしたのであろう。同時に「おじいちゃん、僕の分

まで元気に歌つてね」と聞こえた気がした。そうなのだ。私はまだ修行半ばなのだ。歌えるまで歌わなければ、竜悟にも申し訳が立たない。また間に合う。アルバムを発表しよう。それが「ピアノと唄う愛の詩」81才の私からあなたへ」だった。ちょうどその頃出会ったピアノスト、大貫祐一郎の繊細な音色とともに急ピッチでレコーディングが始まった。あのクリスマスカードの思い出を「見上げてごらん夜の星を」に託し、幼き日を思い起こしながらスローテンポで「乳母車」を歌った。私のお墓の前で泣かないでください」と「千の風になつて」、そして病床で歌った「花は咲く」。

「いままでありがとう」。星になった竜悟に語りかけながら私は心で泣きながら歌った。(すがわら・よういち「歌手」)

歌えるまで歌わなければ